

朱く染まる平野に樹がぼつんと立っていた。陽射しを受けてただ一本だけが天へと伸びろとばかりに成長を促されていた。樹に生えている枝は朱い風に吹かれ、葉っぱを散らしていった。その光景を見ている飛んでいる鳥はゆっくりと樹に向かって羽ばたく。きつと、少しでも綺麗なものを近くで観たいと思つたのだろう。私は何故か、頬が緩んでしまった。微笑みながら友達と連絡を取ろうかなと考えた。空はまだ明るくて、だから月が見えていない。「そろそろかな？」

眩きは朱い風に流されて、鳥に吹いていった。見える風って面白いな、なんてことを呑気に考えていた。

私の思つた通りに空からは陽射しが消えていく。ゆっくりと夜になっていく。光景はまだ綺麗に見えていた。鳥は樹に留まった。やがて、その鳥は眠りに就くのだろう。私が捕まえようとしたその鳥は周りを見ていた。

月光が辺りにばら撒かれる。星屑はきつとまた私の心を捕まえるのだろう。きつとどこかで待ってくれている、あの人の下へと、届け、メッセージ！ なんてくだらないことを考えている内に、私の視界から光が消えた。

私の記憶が混濁から明瞭へと変わる。意識が目の前にある車に変わった。

「どうしたの？」

友達が冷えきった懐炉を頬に当ててくる。やったらニコニコニヤニヤしているのは気のせいだろうか。

「ちよつとね、綺麗な映像を愉しんでいたんだよ。面白いよ？」

からから笑う友達は私の頬をつねる。痛いのでやめて？

「星空がどうのこうのとか、いつもの病気なんですネ」

「まあね。とつても重症な中二病にかかってしまったんです。このままではお医者さんの手にかかるまでもなく治ってしまうでしょう」

「まあ！ それは大変ね。これから、この車に行つて山の中に懺悔をしなければマリア様も許してはくれないのですね？」

「だって、マリア像があつたらそういう想像をしてしまわないかって不安にならない？」

「なりません」

「いきなり現実に戻さないで！」

「じゃ、行こっか」

「あい」

友達は周りに広がる複雑に絡まっている道路を運転するつばいなので私は助手席に座ろうとしたが、危険な運転になるだろうと思つたので自分の自転車に乗った。というか、乗るしかない。

「あれ？　なんで自転車に乗るの？」

「あなたの運転が危険極まりないからでしょ」

「別に事故なんて起こさないわよ」

「その何より素敵な笑顔が逆に怖いのよ」

「大丈夫だよ、ガソリンは入っているから」

「私の意見聞いていた？」

「乗れ」

「やだ」

「じゃあ、自転車のままで乗れ」

「そんな空間無いよ？」

「わかったわ、じゃあ空間創るわね」

「全く、意味のわからないことを言うのは貴女もなんですねえ、美琴君」

そして、美琴は助手席に杖を振ってダークホールという名が相応しい闇の穴がぽっかり空いた。……いや、色々とツツコみたいのだが、なにこれ？

「この穴は何？」

「この穴の中に入れば車に乗れるよ」

「いや、？でしょ。そんなんで私が騙されると思っっているの？」

「いいから入れ」

「はい」

……同じパターンだ、なんか。不毛です、はい。

私は乗っている自転車を、開いている助手席の扉へと向けて進める。すると、

「行つてらっしゃい！」

とまあ、いつものことだが、異世界へと行くのでした。

「はあ、なんで美琴君は異世界が好きなのかねえ」

私を家から追い出して異空間の中に放り込んだことはやはり、馬鹿げているのですけどねえ。異空間の中に自転車ごと落ちていつている感覚が僅かにありながら上を見ると、朱白い空間があるだけで後はもやもやした空気が漂っているだけだった。落ちながら下を見るといつもお世話になっている番人さんが私を見て笑っていた。

「おじさーん！ また来たよお！」

「おう！ 美琴にやられたか？」

「そうです。ここには何も無いって知っているはずなんだけどね。なんか、文句言ったらこんなかに入れられました」

「ハツハツハ！ 相変わらずだなあ」

おじさんはこの異空間の空を見上げながら私を見ていた。ついでおじさんの上で自転車を廻す。そして見事に私ごと自転車を受け止めた。相変わらずなのはこつちもだあ、と思いながら力があるおじさんでありました。

着地して周りを見渡す。やっぱり朱白い空間に道があるだけで、私は何をすればいいのだろうか。

「どうすればええねん」

「まあ、家まで行くとしようか」

「家ねえ……」

「ん？ どうした？」

「家って、この空間と何が違うのかがさっぱりわからんぜよ」

「俺にとって区別が出来れば家ってことだ。そんなことを考えても仕方ないだろう？」

「じゃあ、仕方ないことを考えたおじさんの家に行くことも仕方ないの？」

「そうとも言う」

「それだったらお邪魔しましょう」

「ん？」

上から落ちてくる人が車を乗りこなしているはずの人だったらどうしよう？ とか無駄に不安を煽る言葉を考えていると、おじさんが呟く。

「あの日に戻ってしまっただのか？」

「どうしました？」

「いや、なんでもない。行くか」

「だからそこにあるじゃん」

「行こうかね」

「あつしは無視されるんですねえ」

落ちてくる人は私達を見て邪悪な微笑みを見せて姿を消した。いや、なんでよ。何のために来たの？ あれは。

とりあえず、私とおじさんは地面のない道を歩いていく。すると、突然現れた木造建築物が歩いてきた。

「こんにちはあ。名前無き世界の大家に」

「こんにちは。おじさん、なんかこの女性毎回来てない？」

「美琴がイジワルだからだ」

「なるほどね。喋る家ってなに！ ってツツコみを毎回期待しているんだけどな。まあいいや。入る？」

「うん、色々ツツコみたいんだけどどこを突けばいいのかわからないから無視していい？」
「ダメである」

「あら、残念だわ。私が持っているのはマッチの棒なのに」

「燃やす気か！」

「自分の心を燃やしているだけだから気にしないで」

とまあ、こんだけ会話を繰り返して周りでもしつかり見ましようか。

朱い空間が水平線か地平線か、そんな感じなものはなくどこまでも続く見えない道があるとしか言いようがないのだが。そしてその朱い空間に赤系統な色が混ざっているぐらいかな？
後は、物もなく、者もなく、空もなく、自然もなくである。何も無い空間にただ一つの木造建築物がある。それ以外表現のしようがない私を赦してください。誰に言っているんだろう、私は……。